

急ぎ過ぎだよ 人類は。  
ゆるやかなネットワークを目指す

ITより  
逢いてエ

# 雑報 縄文

いろいろ考えがあふく面白い  
いろんな人がいるのが楽しい

No. 500

2018年10月 夕刊

編集・発行 鈴木厚正

〒266-0005 千葉県緑区菅田町2-21-359

T&F 043-291-2917

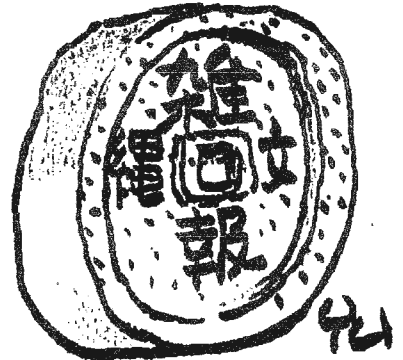
も・く・じ

- シルクロード西域 2
- 老いと病と火傷と 4
- 台便りから 9
- 『歴史と戦争』(後) 11
- 千曲川カヌー下り 17
- 山仕事(9月、大平) 21
- 横浜で木竹伐採 23
- 500号を祝う会(案内) 24

## お待たせしました。

9月26日に実行委員会が  
開かれ、24ページに案内  
をのせることができました。  
委員の皆さん、ありがとう。

五百号祝う会



(「生物多様性……」(後)は、  
次号にのせます。  
希理恵さん、ご免なさい)

9月26日現在の  
会員数 250名

この見本誌をみて新たに

「読んでみようか」という方は、

2018年3月までの 7ヶ月 × ~~250円~~ 250円を

郵便局で 00100-2-20630

「雑報友の会」

へ申し込み下さい。

題 字 或 佐村隆英和尚 (千葉県長柄町本光寺住職)

カ ッ ト : 泉ゆきまさん (にっぽん箱絵の会会長)

印刷機 リソグラフ RZ 330

※この号の切手は、  
「神宿る島」泉像・沖ノ島。

## 山仕事(9月大平)

9月17日(月・休)、うす晴。久しぶりに伊藤(斎)、佐藤、原田、山崎さんとぼくの5人。月曜だが休日のため電車がすいていてありがたい。

敷地駅で、正士、久米、若林さんに迎えられる。正士さんの車にのる時、異臭を感じた。ぼくは肥料の魚粕をのせたのかと思ったが、そんなのはのせてないという。嗅覚にすぐれた山ちゃんが、給油のため停まったときに嗅ぎまわり、床下の鉄板に何かはさまっているという。のぞくと、黒いネコの尻っぽく足のようなものがぶら下がっている。家に着いてから正士さんがあれこれ苦勞の末、つかみ出した。どうやら子猫のようだ。もう干からびていて、後刻火葬に付した。

この日は「敬老の日」で、めぐちゃんと啓士さんが、それぞれ小さなお子連れを連れてきていた。曾母となる春子さんが嬉しそう。

作業は、茶園の草取りと施肥。まず、茶樹のうね間の草を刈り、ついで茶樹の上に顔を出しているワラビやヤマノイモ・アケビなどのつる草をとり除く。つるはまとめてじゃまにならぬよう茶樹の根元に押し込む。草をとったところから、うね間に油かすをまいてゆく。正士さんの茶園は、化学肥料を入れず、草と油かすの有機質だけだ。ちっ素たっぷりの化肥を使わないので、旨味はうすいがすっきりしている。

夕飯、家のそばの斜面の道路際、イノシシが荒らした土を箕で斜面に戻し、側溝にたまった土砂をさらう。ついでに、折れた梅の枝を片づける。

夕食は、カツヲのたたき、マグロのバク焼き、ナスのひき肉みそ炒め、紀文の竹輪にアスパラを挿入したもの(山ちゃんが「挿入」はいやらしいと、「射込み」という言葉を使う。業界用語らしい)、大根と人参のなます、チーズとサラミをのせたクラッカー、そして正士さんの手打ちそば。だしは、久米さんのお手製だ。

英ちゃんと二人、母屋で寢寝。

9月18日(火)、うすぐもり。茶園の続き。久米さんもつるどりに参加。

休憩時、英ちゃんの上からダコが噛みついた。←このくらい大きさを、当地では初めての出現だ。それだけ獣が進出してきているのだろう。これからは、ヒシを含めて注意が必要だ。

昼食は、少し硬い焼きそば。

つるどりの終わったところで、正士さんと山ちゃんが手押し管理機でうね間を耕やしていく。ところが、茶樹の下に押しこんだはずのつる草が管理機の刃にかみつき、とり除くのが大変となった。そこで総出でつる草をひっぱり出す。英ちゃんも管理機の手入れにまわる。

父方、排水溝の泥さらいの続き。うす暗くなって終る。

夕食は、肉じゃが、生サケのバター焼き、王子焼き、カレー味のポテトフライ、かきしどきの煮物、ラッキョウのみそ漬け(久米さん)、白菜の漬物におそば。

食後、前回は話題になった「賤産区の採草問題」について、意見交換。初めに正士さんが、久米さんの協力を得て整理した地元「大平南地区」住民のアンケート結果を説明。23人中19人が「賤産区として責任ある管理をしてほしい」と回答。(個別具体的な中身については省略)

正士さんは、「賤産区運営の手引き」(賤産区の憲法のようなもの)から引用して、「賤産区は公有賤産であり住民の福祉のためにある」と、正面から賤産区の議会で各議員の説得に当たりたいという。

これについて、皆で意見を述べた。皆さんそれぞれ一家言をもつ人たちで、さすがと思った。なかでも久米さんは、アンケートの集約にみる事務処理能力だけでなく、ものごとの理解・判断がすくした人と感じた。さいごは、いずれにしてもぼくたちは正士さんを支えてゆくと表明。

最近になって貴方花親方と相撲協会の軋轢が話題となったが、正士さんと賤産区の関係も似ているなど感じた。どうも日本の社会には、「まっろはぬ者」を受け入れようとする風潮があるようだ。

このあと、久米さんの詩「山仕事のうた」(No.497)をのせる「コンドルはとんでゆく」の楽譜と英ちゃんのカナで歌ってみたが、どうも音が高くて歌いにくい。そのため、久米さんに二度下げをもうよう願ひし、散会。

9月18日(水)、晴。朝、音程を下げた楽譜を久米さんが拵ってきてくれた。昨夜、帰宅したのは1時近くになったはず。感服。

茶園の作業を終え、カレーライスを食べて帰宅の途に。

伊藤弘さん

利島行きを翌日に控えた9月21日朝、伊藤康江さんからメールが入った。「今父ちゃんが救急搬送されました。明日は行けません」。東海汽船と宿に1名キャンセルの連絡をしていると、追いかけて「死去」のメールが。

康江さんの「父ちゃん」は、浮き世離れした人だった。松枝枝村に泊まって、燧岳や会津駒岳に登り、会津・三島町の「サイの神」など一緒したが、いつも温厚でニコニコ。世の中に白金があるなんてトシとご存知ない様子。明治大学で「強電」を教之ながら、ヒューズの交換は康江さんの仕事。

健康そのもので、ぼくは百歳は優にと思っていた。数年前から認知症が出て、康江さんのお出掛けもままならなかったが、やっと落着いた矢先。ありし日のお姿を思いながら、ご冥福を願っています。